

古くて若い国——モンゴルの現状

相互補完的交流の拡大を

駐日モンゴル国大使 ソドブジャムツ・フレルバートル



善 隣

私は若いころから日本と関係する仕事に携わってきました。モンゴルの外務省で40年近く、アジア、北東アジア、その中で日本のことを担当し続けてきました。東京のモンゴル大使館勤務は、今回で3度目です。日本にいるときは、モンゴルの話をあちこちでしています。

モンゴルは古くて若い国です。モンゴルは匈奴の時代から現在までの長い歴史を誇りに思っています。「匈奴」はモンゴル語で「フンヌ」と言いますが、モンゴルとトルコ系の人たちが中心になって作った中央アジアで初めての国家です。で、われわれもフンヌが、最初のモンゴルの国と思っています。そこから数えるとモンゴルは2000年の伝統を持つ、古い国であるわけです。

■民主主義への道

24年前から、モンゴルは民主主義の道を歩み出しました。それ以来、社会の体制に後戻りはなく、民主主義は強化されています。

モンゴルの歴史の一番の特徴は、13世紀にユーラシアに大帝国をつくったことです。これはわれわれが誇りに思うところですが、一方、17世紀には世界の地図からモンゴルという国が消えたという悲しい歴史もあります。チンギス・ハーンの息子や孫たちの権力闘争によって、たくさんの小さな王国に割れてしまい、満州族の清国の圧迫に押されて、世界の地図から消えてしまったのです。

モンゴルが再び登場してきたのは、1911年のことです。中国で（漢民族の）辛亥革命が起きると、モンゴルは中国と共に、清国から独立しました。モンゴルはその後、ソ連に続いて世界で2番目の社会主義国として70年間も歩いてきました。今でも、モンゴルはどうして共産圏の国になったのですか？と言われるのですが、私個人の考えでは、モンゴルは共産主義の国にならなくてなったわけではなかったのです。それはまず独立を手に入れて、それを維持、保全していくためのやむを得ない選択だったのです。

1912年にモンゴルが清から独立を宣言したとき、残念ながらそれを承認してくれる国は1国もありませんでした。当時のモンゴルのボクド・ハーン王が、



清朝末期、モンゴルをめぐる国際環境

日本の天皇陛下、ロシアのツァー、そのほかドイツ、イギリス、アメリカなど当時の大国の首脳に、独立を認めてくれるように頼み、友好親善、交流関係を発展する希望を述べた親書を送りましたが、残念ながらどの1国からも、肯定する返事はありませんでした。その理由は中国との関係で、中国が「モンゴルは中国の一部だ」と主張していたからです。モンゴルはそれに抵抗し続けました。

しかし、中国とロシアがモンゴルを交えて3か国で交渉した結果、ロシアはモ

ンゴルに対する中国の主権を認めてしまい、1915年のキャフタ条約で、モンゴルは中国の自治区になってしまいました。モンゴルはそれを認めず、戦いました。それに対して中国は1919年、征服するために軍隊を送ってきました。

モンゴルの愛国者たちは、北の隣国ロシアで1917年に起こった10月革命の勝者、ソビエト・ロシアに軍事援助を求めました。当時、モンゴルには10月革命で負けた白軍が逃げ込んで来ていましたから、それと中国の軍隊の二重の軍隊に支配されることになったからです。

幸いソビエト・ロシアの赤軍が来てくれて、白軍も中国軍も追っ払ってくれました。この1921年の出来事をわれわれは「モンゴル人民革命」と言います。

それで独立を果し、独立国としてがんばっていくチャンスを手に入れたわけですが、それはまた大変な選択をわれわれにつきました。

助けてくれたソビエト・ロシアは、共産主義イデオロギーをわれわれに押しつけてきたのです。モンゴルの人々は共産主義を知りません。19世紀の初めごろヨーロッパで生まれた労働者階級の思想、マルクス・レーニン主義、それが遊牧社会のモンゴルに通用しないのは勿論のこと

です。しかし、それを受け入れなければ、モンゴルは中国に戻ってしまう、そういう厳しい状況でありました。

その時のやむを得ずの選択が、中国の下に戻るよりは共産主義は分らないにしても、ソ連にある程度依存することが独立を維持、保全できる唯一のチャンスということ、やむを得ず共産圏の国になってしまったのです。

モンゴルは共産圏の中で70年間、1990年まで、ソ連に次いで2番目の社会主義国としてやってきました。もっともソ連時代にはまったく太陽がなかった、暗かったとは言えません。モンゴルは教育、医療、社会体制、そういう分野では前進、発展しました。しかし、その他の面では70年間止まってしまいました。たいへんな時代でした。

まず共産主義のイデオロギーが合わないことを分かった人たちの反発が、1920年代、30年代、40年代、50年代と、10年ごとに現れてきました。特に30年代末、40年代の初めごろは激しいものがありました。その人たちが反革命運動、反体制運動として、きびしく、激しく、弾圧された残念な歴史もあります。

1921年当時、モンゴルの人口はわずか60万人でした。そして、反体制運動

に対する弾圧で3万人が殺されました。「反体制分子」、「日本のスパイ」などの名目で大勢が捕まって、短くて10年、長い人は20年も刑務所に入れられました。

弾圧は怖いけれど、体制に対する反発は10年ごとにありました。50年代にフルシチョフがスターリンを批判した時にチャンスがきたと思って、モンゴルのインテリたちを先頭に体制批判の運動が起きましたが、この時もまた厳しく押えつけられました。

唯一のチャンスはソ連にゴルバチョフが登場してきて、ペレストロイカという政策を行った時代です。モンゴルはチャンスが来たと受け止め、1990年に民主主義革命が行われました。モンゴルのその革命は、東ヨーロッパの国々と比べれば、非常に平穏で、政治と経済の改革を同時に行ったという特徴がありました。誰一人も血を流さず、誰一人の家の窓ガラスも割れませんでした。デモとストライキで、共産主義の体制を拒否することができたのです。

それは何を意味しているかと言えば、



モンゴルは草原の国

モンゴルの国民、モンゴルという国は、その変化を目指して待っていた、そのために早くから皆がんばって闘ってきたということを物語っています。

1990年の3月から今年で25年間、モンゴルは民主主義の道を歩んできています。政治体制の民主化、社会の民主化にはそれほど困難はなく、成功裏に終わりました。社会主

義の経済を倒すことは簡単でしたが、それに代えて市場経済のシステムに移行する、新しい発展を加速していくことはそう簡単ではありませんでした。いまだにいろいろ矛盾があります。そして2年前から新しい発展を目指して、あらためてがんばっています。

■新しい発展を目指して

その新しい発展というのは、市場経済システムはだいたい整ったので、これからは豊富にある鉱物資源の開発を中心に、

新しい発展を目指す。その開発に必要なインフラストラクチャーの整備、それを動かす人づくりを進める。そういう目標を立てて、スタート地点をもう出発しました。今は数々の鉱物資源の開発を目指してがんばっている最中です。

この後は皆さんの質問に答えることにしましょう。

問…経済政策について、もう少し詳しく説明してください。

答…モンゴル経済の柱は、まず牧畜、それにビニールなどを加工するといった軽工業が中心でした。1950年代の終わりがごろから、農業を始めました。主には小麦、野菜づくりです。野菜の種類は少なく、じゃがいも、きゃべつ、にんじんくらいですが、最近では、モンゴルは農業の国であるということで、農牧業プラス産業化を目指しています。

しかし、産業の中では、やはりまず地下資源の開発が主です。

地下資源は何があるかと聞かれますが、何がないかと聞くほうが簡単です。何でもありません。石油だけがないと言われましたが、まだ量は少ないものの、石油も出るようになりました。まだ国全体の地質調査は30%ぐらいしかやっていませんので、これから何が出てくるか分からない

い、非常に楽しい将来性のある国です。タバントルゴイの世界最大の炭田に加えて、銅についても、世界10本の指に入っていたエルデネット・コンビナートがあり、さらにアメリカのより大きい開発が2年前に始まりました。今は石油とコークスと、世界一といわれている炭田、その開発をできれば今年から、できなければ来年から開発を始めようと準備を進めています。

このほかレアアースもたくさんあります。15の鉱物資源の開発を重要な戦略的なプロジェクトとして、新しい発展を図るということで、必要なインフラ整備からスタートしています。

その中には国内の鉄道線の整備も入っています。モンゴルの鉄道は20世紀の50年代の終わりごろにできた1本線だけです。ロシアから入って中国に出ていく1本です。そこでそれに加えて東と西で、それぞれに北から南へという線を造っていく、そういう国内鉄道のプロジェクトを今考えています。

それと同時に道路です。道路はウランバートル周辺の県には、舗装した道路がありますが、そのほかの21の県は舗装道路がありません。2年間かけて、21の県とウランバートルを舗装した道路でつな

ぐ建設が始まっています。それから地下資源の開発には、電力が不足していますから、銅、石炭の埋蔵量があるところ、首都のウランバートル、その他新しい産業中心地に、全部で5つの大きな火力発電所の建設を考えています。

今、ウランバートルには大きな火力発電所が4つありますが、さらに5つの大きな火力発電所を造ります。そして銅を精錬する工場を造って、完全な製品を作ること、石炭を加工する工場、コークス加工工場、石炭から天然ガスをつくる工場、それに関連して化学工場、製鉄工場などを同時に興していこうという計画です。

建築にもこれから力を入れなければなりません。モンゴルの人口はわずか290万人ですが、その半分以上はウランバートルに集中しています。ウランバートルは住宅も不足しているし、インフラが何でも足りなくなっています。それは人口がどんどん集中してくるからです。

昨日まで牧民だった人たちが、より良い生活を求め



遊牧民は今国民の3割程度

てウランバートルにやって来るのですが、実際には仕事がない。だから収入が少ない。生活水準は高くはないです。彼らは地方から持ってきたゲルという移動用住宅で、生の石炭を焚いて生活しています。そのおかげで、最近ウランバートルの大気汚染が深刻な問題になっています。11月から4月までの寒い時期に石炭を焚きますから、その時期のウランバートルの空気は真っ暗です。今は北京がひどいと言っていますが、モンゴルも半年間、大気汚染が大変です。

したがって大々的に建築を進めて、地方の人々が住める場所をつくること、またウランバートルからそれぞれの故郷に戻って生活をする条件をつくること、それに政府は力を入れています。

そのためにはそれぞれの専門を持つ若い人たちの育成が大事です。一般の教育制度のほかに鉱山、工業、道路、インフラの建築と、道路、橋、電気、それぞれの専門を持つエンジニア、機械の作業員、そういう人材をつくるの

が今の大きな課題です。勿論、モンゴルは自分でもがんばっています、日本に対する期待は大きいです。

日本に協力してもらいたいと思っています。経済協力、文化交流、教育交流をモンゴルの新しい発展と関連して発展させていきたいと希望しています。

今は日本に6千人くらいのモンゴル人が住んでいます、そのうちの1300人が留学生です。日本語、コンピュータ、経済、法律、そういう専門の人はすばらしいけれど、それよりモンゴルにはいろいろな機械を任せられる人や、建築の技師が必要ですから、日本政府の教育円借款をもらって、モンゴルの若い人たちを日本の大学、高専で、勉強してもらいたいと考えています。

2週間前に日本政府は、教育借款を与えることを決定しました。モンゴルは5年間に1千人の若い人を日本に派遣して、大学、高専で勉強させようと思っています。他にも、中国、韓国、アメリカ、ドイツにも学生を送っています。そういう



草原に進む都市化

若い力でプロジェクトを推進して新しい発展ができるように計画しています。

問…モンゴルの女性の地位は？

答…伝統的にはモンゴルでは、女性の地位は高いです。社会主義の時代には人口を増やす目的で、子どもを持っている母親たちへの特別手当を支給していた時代があります、教育には力を入れてきました。そのおかげでモンゴルでは、ジェンダーの問題は他の国、特に他のアジアの国に比べると大きくありません。

今モンゴルで、医者の半分以上、学校の教員の3分の2以上が女性です。女性の方たちが強くて、モンゴルの国会議員は76人いますが、うち11人が女性です。来月の末にはモンゴルの女性議員が日本を訪問することになっています。安倍さんが昨年国連で演説して、「女性の活力を」と宣言しましたが、モンゴルでは女性の地位は高いレベルにあると思います。日本の大使館には外交官がわずか7人で

ですが、そのうち4人が女性です。これもモンゴルの社会での女性の地位を物語る数字ではないかと思っています。

問…最近、格差が問題になっていると言われていますが。

答…格差はわれわれが今非常に悩んでいることです。社会主義時代には旧ソ連、東欧の国から借款をもらって、それを社会の発展に使っていましたが、金持ちもいなければ貧乏人もいませんでした。皆、豊かではないけれど、貧しい生活をする人も少なかったのです。

民主主義社会は大変いいのですが、人口の割合を見ると、今は半分以上の人が貧困レベルまで生活の質が落ちてしまいました。わずか5%の人が金持ちになりました。こういう問題をどう解決するのか、政治、社会、経済の大きな問題です。その解決方法をめぐって、モンゴルも今、議論、議論です。皆が心配しているので状況は変わるとしています。まず新しい発展、その中の1人1人がどういう仕事をして、どういう生活をするか、正しくやっていけば、少しずつ直っていくと思います。

社会主義時代のことを考えて、「あの頃はよかった。国がみんな面倒見てくれた」と言う人たちもまだまだいるのです

が、それはそうではありません。自由主義、自分のために責任を持つてがんばる、そういう意思を持つ、そういうことが大事だと思います。何もせずに、国から手当てをもらいたい。そういう人たちも残念ながらまだまだいるのです。しかし、貧しい生活を送っている人たちに、いろいろな専門の教育、仕事を与えて、生活を向上させる手助けをする、そういう政策をどんどん進めようと思っています。失業率が最近、あまり減りません。仕事場をつくるためには、いろいろなプロジェクトを進め、失業している若い人たちを、それぞれ専門の仕事につかせる。そうやっていくことが大事です。時間の問題です。完全なレベルまでの解決は難しいですが、少しずつアップすること、それがこれからの道筋だと思います。

核のゴミは受け入れない

問…産業廃棄物についての考え方。核廃棄物の受け入れは？

答…産業廃棄物の質問がありました。普通のゴミ処理もたいへんなことです。最近まではウランバートルではそれは大きな問題ではありませんでした。各地方の中心地や、集落のゴミは、少し離れた所に行って、穴を掘って埋めてしまえば

すむという時代がありました。しかし、今やウランバートルは130万人が集中している大都市になってしまいましたので、ゴミ処理はそろそろ世界のほかの大都市と同じように解決しなければならぬということ、今準備が進んでいます。外国の例を見て、力を入れてやっていますから解決すると思います。

問題は核廃棄物です。モンゴルには核はないです。原発はないです。しかし、原発を造ろうという動きがありました。日本から核廃棄物を持ってきて埋めるという話もありました。あったとしても、政府間で正式な話し合いや交渉などが行われた、ということではありません。アジアの中でモンゴルはそういう廃棄物を埋めるのに一番適している所ではないかという議論があったのです。

日本はモンゴルにくらべると、4分の1の国土です。そして原発の廃棄物は青森県を中心に、国内で保存しているわけです。日本は地震が多い。土地が柔らかい。よく雪崩が起こります。雨が多い国です。しかし今のところは、皆さんは安全に埋めることができます。モンゴルは中央アジアの高原ですから、高い所にあります。雨量が少ないです。日本で一日に降る雨の量がモンゴルでは

一年間の量になります。土地が硬いです。そしてゴビ砂漠には500kmの範囲内には誰も住んでいないという所があります。そこで、そこまで廃棄物を持って行って埋めたらどうか、というアイデアがあったわけです。それでモンゴルも検討しました。でも政府間による正式な交渉ではありません。学者レベル、あるいは会社レベルの話でした。

しかし、福島原発事故の後、その話はやめました。モンゴルで原発を造る議論も中止しました。したがって核廃棄物を持って行って、埋める話もやめまじょうとなりしました。日本には広島、福島の悲劇があれば、福島の悲劇もあります。核は恐ろしいものです。だからやめまじょうとなりました。市民運動が激しいのです。政府もそれに配慮しました。したがって、核廃棄物の話はゼロです。

もつと交流を

問…日本との交流の展望は？

答…日本をはじめとする先進諸国との協力、交流は重要です。今、日本とモンゴルの関係では「戦略的パートナーシップ」という原則を掲げています。モンゴルは民主化の直後からの15、16年間は、総合的パートナーシップという原則で2

国間の関係を進めてきました。それは政治対話、経済交流、貿易拡大、文化芸術、スポーツ交流、教育交流、市民団体との交流、国際舞台での交流など、総合的なパートナーシップということです。上手くいきましました。関係のレベルも高くなり、幅も広がって、拡大されました。

そして2010年11月に、エルベグドルジ大統領が来日し、日本とモンゴルの関係を次の新しいステップを目指して、戦略的パートナーシップの原則でいきましようということになり、今ちょうどそれを実現する最中でありま。

昨年3月、安倍首相がモンゴルを訪問し、9月にモンゴルのアルタンホヤグ首相が日本を訪問しました。この首相の相互訪問を通じてモンゴルと日本の戦略的パートナーシップのための「中期的行動計画」の文書に署名しました。その中には、各分野で日本とモンゴルの協力関係を発展させる具体的な目標、プロジェクトが書いてあります。その中の1つがモンゴルでの産業の育成で、日本のIT企業が協力することが書いてあります。

その戦略的パートナーシップの主な課題は、まずお互いをよく理解し合うための、信頼できる政治対話です。そして日本とモンゴルも一緒に位置している北東

アジアの安定、地域の安全保障のために努力していこうということです。

次の大きな課題は、今までの経済交流の原則を変えていこうということです。モンゴルもこれからは経済に余裕ができてきますので、「互恵かつ相互的に補完した経済交流」、それを中心に進めていこうと思っています。補完というのは、モンゴルに不足しているのは資金と先端技術です。日本に不足しているのは鉱物資源です。お互いにないものを出し合って、協力していく。モンゴルは大量の鉱物、レアアースを日本に輸出したい、長期的、大量に、安定的に。その代わりに日本からの投資がほしいのです。円借款が欲しいのです。何より先端技術の導入が欲しいです。

問…モンゴルの外交政策について。

答…外交について質問して欲しいと思っています。モンゴルの周りの国際情勢はそう簡単ではありません。したがってモンゴルの外交の課題、その実現も簡単ではありません。社会主義時代の外交は、完全にソ連に依存していましたから、いつもモスクワの方を見て、外交をやっていました。新時代のモンゴル独自の外交が生まれたのは、民主化の直後、1990年代の初めごろですが、モンゴルの外

交路線は専門用語では「多元的外交」と言っています。

多元的という哲学を考えると「バランスの外交」です。まず一番上にくるのは、北と南の両隣国とのバランスの取れた善隣関係です。過去にはロシアに向いたら中国と対立し、中国と少しよくなるとロシアとの関係は難しくなる、そういうのが今までの歴史でした。ここから大きな教訓をわれわれは得ました。

これからはロシアとも中国とも行き過ぎず、できるだけバランスの取れた隣国の関係、善隣関係を進めたいということが最重要視されています。そしてそれより大事なことは、ロシアと中国を合わせ、それとバランスのとれる第3番目の相手をつくることです。われわれの専門用語では「第三の隣国との外交」と言います。国境を接していなくても、モンゴルといい関係のパートナー持つ、その第三の隣国は特定の国ではありません。日本、アジア、アメリカ、ヨーロッパ、国際機関、国連、それらを全部合わせて、ロシア・中国とバランスをとる。そういう力になってほしいのです。

元々アジアの一員ですから、アジア諸国との二国間関係に力を入れたい。アジア地域内の統合にもモンゴルは参加して

いきたいです。国連を中心にした国際機関、その活動にも参加して、協力し貢献していきたい。そういう外交が多元的、バランスの外交です。

その中で日本に期待することは、「第三の隣国」です。日本との交流、協力関係の拡大が、政治的にも、経済的にも、ロシアと中国の関係とバランスの取れることが望ましい。幸い今は日本とモンゴルの関係が非常にいい時期です。北東アジアでの二国間関係の中では、モンゴルと日本が一番親しいです。

私がいろいろな所で講演するときに強調していることがあります。それは日本とモンゴルの関係は地域内の国々との二国間関係の模範になる、新しい関係に生まれ変わったということです。わずか20何年前には日本に対するモンゴルの人々の認識、理解、態度、考えはとても厳しいものがありました。今の中国以上のものでした。しかしそれを変えることができたのです。なぜできたかというと、日本とモンゴルの国益が合致したのです。

モンゴル側から見ると、旧ソ連圏が崩壊して、コメコン（旧共産圏の経済協力機構）の援助がストップしました。人々の生活水準が落ちてしまいました。苦しくなりました。そのとき、モンゴルの民

主化を支援し、モンゴルの国民を救いだすために、世界のどこの国よりいち早く手を差し伸べてくれたのが日本でした。

最初は緊急援助、食料、市場経済への移行期への協力、そして新しい発展の基盤づくり、日本は積極的に協力してくれました。それを見たモンゴルの人々が感動しました。感謝しました。私は講演するとき、モンゴルの人々の日本に対する気持ちは「3つのK、スリーK」だと言います。それは皆さんが使いなれた3Kとは逆です。「感謝」「関心」「期待」の3Kです。われわれが一番苦しかった時期に、よく助けてくれた、ありがとうという感謝です。救ってくれた日本に対する関心はすごいです。日本と仲よくしたいという関心が本当に大きくなっています。3番目のKは、これからモンゴルの新しい発展において、日本に対する「期待」です。日本と協力していけば、新しい発展は可能になるという期待です。

過去にいろいろな不幸があったといっても、それを教訓と受け取る。過去にあったいろいろな問題を解決するためにも、将来のことを考える。お互いにかんばればできないことはないとしたのは日本とモンゴルの関係です。地域内の事情が非常に厳しい今こそ、他の国々との関係

の模範になるべきと思います。

問…都市化が進むと、モンゴルの伝統文化がなくなるのでは？

答…都市化の問題ですが、一時的なものだと思います。1950年代の初めまでは、モンゴルに大きな都市はありませんでした。ほとんどが遊牧民でした。その後、新しくできたウランバートルの軽工業の労働者、それに商人、サラリーマンとか、そういう人たちが出てきたのですが、民主化を経て、21世紀に入ってからモンゴルは大きく変わりました。

今の人口を見ると、純粹の牧民の生活をしている人口は、3割いるかいけないかです。その人々が伝統的なわれわれの遊牧文化の持ち主たちです。全体の5割が地方で暮らしていますが、その中の3割が遊牧、あとの2割の地方住人は都市住民でもなければ、牧民でもない。そして仕事をあまりしない。牧民から家畜、肉、皮を買い取って、町に持って行って売るとかそういう商売をしている。でも完全な商人ではない。そういう何ともいえない人たちです。

ウランバートルに全人口の半分といっても、その半分以上は、昨日までは牧民です。家畜を自然災害で失くした人や、いろいろな原因で生活が苦しくなった人

たちが、生活を求めてウランバートルにやってきました。そういう人たちは専門があるわけではありませんから、どこに行っても仕事を簡単には見つけれません。だから苦しい生活です。国からの手当てでやっている人たちがウランバートルの周りに多くなっています。

ウランバートルの中にはインテリ、商人、サラリーマンといろいろですが、モンゴルのインテリは変な人になってしまいました。それは教育です。顔はモンゴル、しかし頭がとり代わっているのです。20年間いろいろな国に留学生を送ったら、帰って来た人はそれぞれの国の頭を持ってきた。日本に5年、10年といた人は日本人の頭になっている。アメリカに行った人、ドイツに行った人、皆そうです。皆さんは誰か1人に会ってモンゴル人はこんな者と思ったら大間違いですよ。

ですから伝統的な文化、それを維持、保全し、尊重している人口はどのくらいか。モンゴル人が誰になっちゃったのか。これは大きな「？」です。でもグローバル時代ですから、皆を百パーセント、遊牧民の頭にしておくことは無理です。モンゴルも新しい発展を目指していますので、近代化、そのための知識、そういうものがが必要です。と同時に伝統的なモ

ンゴルの文化、そのアイデンティティ、それを維持、保全していきたい、政府はそういう政策です。

そのためにまず自分の歴史に対する正しい理解、認識、そしてモンゴルの文化の維持、保全です。モンゴル語、モンゴル文字、モンゴルの民謡、馬頭琴、ナードム（祭り）、相撲、競馬、弓など、大多数のアイデンティティを守っていけば、モンゴル人はモンゴル人で残る。グローバル化は時代ですからしかたがない。最近のモンゴルは議論が多いです。

これからモンゴルはどういう国になるべきか。そのために、どういう課題、目標を立てなければいけないか、どうやって実現できるかの議論です。たいへんですが、それはいいことです。その中からわれわれが歩む道を見つけるのです。20年間議論していますから、もう少しすれば自分たちの道を見つけられるのではないかと思います。

問…大使は和歌に詳しく、宮中の歌会始めに出席されたとか？

答…確かに私は2回、歌会始に招待されました。十数年前に前回大使だったときに呼ばれました。そのとき私は、日本の短歌、俳句には興味がありました、あまり分からなかった。幸い日本語がで

きる大使ということで、ロシアのパノフ大使と一緒に呼ばれました。彼とはモスクワの国際大学で一緒でした。お互いに日本の文化に興味があるという話を耳にして2人を招待してくださったのだと思います。そのおかげで、俳句、短歌への興味が増大しました。それは特別に勉強しないと難しいものですから、アジア大学の名誉教授の神沢有三先生に弟子入りさせてもらったのです。いまだに神沢先生と月に1回会って、歌づくりを勉強させてもらっています。時々、自分でもつくりますが、先生は「まだまだ」と言って直してくれます。

（2月28日・フォーラム）

講師略歴（ソドジャムツ・フレルバートル）

1951年	ウランバートル市生まれ
1976年	旧ソ連・モスクワ国際大学卒業、外務省アジア局勤務
1981～87年	駐日大使館在勤
1997～01年	駐日特命全権大使
2005～08年	外務省アジア局長
2008～11年	駐朝鮮特命全権大使
2012～	駐日特命全権大使